



石から緑色を得る

海緑石 かいりょせき



福岡県の王塚古墳をはじめ、九州の装飾古墳の緑には、海緑石が使われている。堆積岩に含まれる粘土鉱物で、彩度が低く淡い暗緑色が特徴だ。津久見市堅浦の海岸に打ち上げられている小石や、浜に見え隠れする岩が海緑石だ。それらは小笠原諸島の父島や北海道の礼文島で見つけた緑の石・土、そしてイタリアのテールベルトとも緑味が少し異なるように見える。堅浦のものは少々白っぽく感じる。不純物の混ざり具合のせいだろう。

こうした石や土から得られる緑は、臼杵磨崖仏ホキ石仏第一群の第四龕^{がん}、中心の地藏菩薩半跏像の袖に使われている。眼を凝らしてみると、緑の色を見つげられるだろう。



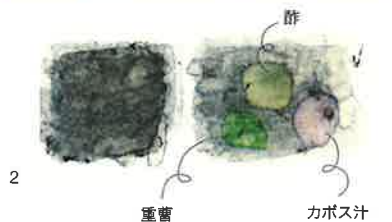
1 臼杵磨崖仏の中の地藏菩薩半跏像。海緑石で塗られた緑が見られる。見学には双眼鏡を持参したい。
2 左より、津久見市堅徳①、津久見市堅徳②、イタリアのテールベルト、ロシア緑土。

十露草、十藍で緑に



7～9月に咲く青い花、露草(ツククサ)は、夏場に目にする草花の代表格だ。子供の頃、この花を摘んで、青い色水をつくった思い出がある人も多いのではないだろうか。この色水は、水で洗うと青い色が溶ける性質を利用して、染色の下描きに用いられる。

浮世絵では、青い絵の具の1つとして使われる他、藤黄と混ぜて緑の絵の具にしていた。藤黄(別名:ガンボージ)は、東南アジア原産のオトギリソウ科フクギ属の常緑高木から採った樹脂で、透明感のある黄色だ。版画の場合、初めから混色する方法と、青、黄色(あるいはその逆)と、刷り重ねする方法がある。両方実験してみたが、大差はなかった。また、藍と藤黄を混ぜても緑になるが、露草に比べると暗い色になる。(露草を使った絵の具づくりは付録ページ参照)



1 露草の押し花。葉っぱはすぐに枯れてしまったが、花びらの青は残る。花びらに重曹を付けると、緑味が強くなった。
2 花からの青い液で紙を染める。重曹、お酢、カボス汁を付けると、色が変わる。

孔雀石



鮮やかな緑、孔雀石の出番は、海緑石よりも少しだけ先の時代だ。銅を主成分とするマラカイトは、同心円状の縞模様があり、磨くと孔雀の羽に似ていることから日本名を孔雀石と言う。銅が酸化すると青(アズライト/藍銅鉱)や緑(マラカイト/孔雀石)になる。つまり孔雀石は銅が腐食したとも言える。奈良の大仏を造作する時には全国から銅が集められた。一番多く産出したのが山口県長登銅山で、ここからは良質の孔雀石や藍銅鉱も産出された。海緑石より鮮やかな緑である孔雀石は、この頃より壁画や仏像などに使われ始めた。兵庫県の多田銀銅山では、豊臣秀吉が狩野山楽に採掘権を与え、絵を描かせた。

大分県では佐伯市宇目の木浦鉱山でも藍銅鉱と孔雀石を産出しており、大分市在住の理学博士、野田雅之さんが50年以上前に採集した石が、豊後大野市歴史民俗資料館にある。野田さんの自宅に保管されているモノも見せていただいたが、見事な青と緑の入り混じった原石だった(藍銅鉱と孔雀石は主成分が同じなので、一緒に産出する)。しかし残念ながら、絵の具の顔料として採掘したという記録は見当たらない。

佐伯市の小学校が藤河内溪谷へ遠足に行くというので、石を拾ってきてほしいと頼んだ。その時、男の子が拾ってきた石が青みを帯びていた。初めは塗料でも付いている?と思ったが、蛍光X線で分析すると、銅が検出された。藤河内溪谷は木浦鉱山のすぐそばだ。また木浦鉱山の近くで拾った緑の石からも、銅が検出された。これは想像だが、海緑石よりも鮮やかな緑や青の石を見つけたら、絵の具として試したくなくてもおかしくないだろう。自然の中から普段は目にするのでできないモノを見つけると、想像力は膨らむのだった。

佐伯市立宇目緑豊小学校4年生の男の子が、藤河内溪谷の遠足で見つけた石。青からは銅の成分が検出された。

